Future Earth国内連携の事例紹介
- SDGsへの貢献を目的とした、民間セクターとアカデミアとの協働

長崎大学大学院
Future Earth国際事務局日本ハブ
春日文子

futurearth
research. innovation. sustainability.

2023年は、SDGsが目指す2030年までのちょうど中間年
しかし、SDGs推進にはまだ多くの課題が

- COVID-19とロシアによるウクライナ侵攻により、SDGsの推進にも世界中で深刻な影響、遅れが生じている
- シナジーとトレードオフをどのように把握し、調整するのか
- 個々（個人、企業その他団体、自治体など）の推進活動の成果を、どのように国の、そして世界のSDGs達成に結びつけるのか
- 具体的な達成目標（ターゲット）が定まっていない状態で、どのようにSDGs達成を評価するのか

SDGsの３層構造：ゴール、ターゲット、指標

12: つくる責任つかう責任

12 つくる責任 つかう責任

持続可能な生産消費形態を確保する

Ensure sustainable consumption and production patterns

ターゲット	Target
12.1	開発途上国の開発状況や能力を勘案しつつ、持続可能な消費と生産に関する10年計画枠組み（10YFP）を実施し、先進国主導の下、全ての国々が対策を講じる。 Implement the 10-Year Framework of Programmes on Sustainable Consumption and Production Patterns, all countries taking action, with developed countries taking the lead, taking into account the development and capabilities of developing countries

グローバル指標	Global Indicator
12.1.1	持続可能な消費と生産への移行を支援することを目的とした政策手段を開発、採用、又は実施している国の数 Number of countries developing, adopting or implementing policy instruments aimed at supporting the shift to sustainable consumption and production

グローバルに提案されているターゲットは169個。

「ターゲットは、地球規模レベルでの目標を踏まえつつ、各国の置かれた状況を念頭に、各国政府が定めるものとなる。」

futurearth
research. innovation. sustainability.

イオン環境財団「Future Earth」対話プロジェクト

目的

① 日本としてのSDGsターゲットを考えるための対話的プロセスを、対話の実践を通じて提案する。

② SDGsの目標達成に向けたターゲットを日本の文脈で考え、その進捗を測る指標を考える。

- 主催団体：(公財）イオン環境財団、国立環境研究所、Future Earth 日本ハブ
- 協力団体：慶應義塾大学、Global Compact Network Japan、（一社）SDGs市民社会ネットワーク、(一社）SWiTCH

futurearth
research. innovation. sustainability.

イオン環境財団「Future Earth」対話プロジェクト
３つのステップを採用し、学生さんや若手社員と討論

Future Earthはイオン環境財団・国立環境研究所他、様々な団体と協力し、SDGsターゲット設定のための若者との対話会合を連続開催。

地球環境に関するレクチャーに続き

３つのステップ

1. ありたい未来（2030年）のすがた
2. 現状の問題点、課題
3. ギャップを埋めるための目標としてのターゲットの提案

futurearth
research. innovation. sustainability.

自分や社会のありたい姿（2030年の未来像）

① １人１人が社会に参加していると実感できる。

② 人々・社会・地球環境が健やかである（ウェルビーイングの実現）。

③ 柔軟で、困難な状況から回復しやすい。

④ 人々の多様な価値観が尊重されている。

⑤ 国内外の様々な問題のつながりが理解されている。

日本の現状と課題

① 実態のない場合にもSDGs の名前だけが使われている。
② 世の中の様々な仕組み・問題の関わりが見えない。
③ 世代や性別、経済状況などに分断や格差がある。
④ SDGs に関心を持っても、実社会で関わる場が少ない。
⑤ 行政的なルール（規制や法制度）が足りない。

ゴール12のターゲット(対話会合段階のアイディア）

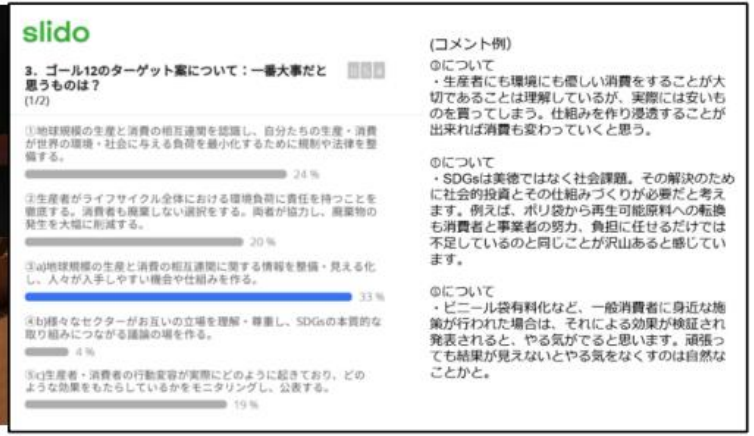
① 日本でモノを作ること・使うことが、他国の人々や地球環境にどのような影響をおよぼしているか、皆が知ることができる仕組みを作る（影響の見える化）。
② 日本でモノを作ること・使うことが、原材料の生産国など他国の環境や社会に負荷をかけないようなルールを作る（規制、法整備）
③ モノを作る人がその“モノ”が捨てられるところまで、環境に与える影響に責任を持つようにする。買う人・使う人も、ゴミを減らす責任を持つ。
④ 作る人、使う人など様々な立場の人が、お互いを理解・尊重し、SDGs の本質的な取り組みについて話し合いができる場を作る。
⑤ 人々の行動の変化がどのように起きており、どんな効果が生まれているかを、皆が見ることができる仕組みを作る（行動と効果の見える化）。

futurearth
research. innovation. sustainability.

Future Earth:
SDGsのターゲット（達成目標）設定に向けた提案に向けて

（会場写真）

（slido を使った意見出し例）



futurearth
research. innovation. sustainability.

外務省
Ministry of Foreign Affairs of Japan

本文へ | English | 文字サイズ 中 大 特大

検索

https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/index.html

JAPAN SDGs Action Platform

このプラットフォームは、社会に広がるSDGsに関連した取組を幅広く紹介することを目的に運営しています

SDGsとは？ | 日本政府の取組 | ジャパンSDGsアワード | お役立ち情報

令和5年7月28日
> 第７回ジャパンSDGsアワードの公募を開始しました。

令和5年7月20日
> 国連ハイレベル政治フォーラム2023において武井外務副大臣がステートメントを発出しました。

令和5年3月17日
> SDGs推進円卓会議民間構成員による「SDGs実施指針に関する提言書」が岸田総理大臣に手交されました。（概要）

令和5年3月17日
> 持続可能な開発目標（SDGs）推進本部会合（第13回）が開催され、「SDGsアクションプラン2023（PDF）」「第6回ジャパンSDGsアワード受賞団体」が決定されました。

令和4年12月20日
> 持続可能な開発目標（SDGs）推進円卓会議（第15回会合）の開催（概要）

令和4年10月7日
> 「SDGs実施指針に関するパートナーシップ会議2022（第２回）」の開催

令和4年9月6日
> 「SDGs実施指針に関するパートナーシップ会議2022（第２回）」に向けて、日本のSDGsの取組や政策に関する提言の募集を開始しました。（外部リンク）

SDGs実施指針改定に関するパートナーシップ会議（第2回）に寄せられた提言

https://www.japan.coop/wp/publication/11938

SDGs実施指針改定に関するパートナーシップ会議（第2回）に寄せられた提言

提言の募集について
SDGs実施指針改定に関するパートナーシップ会議（第2回）に寄せられた提言

団体名	国立環境研究所
提言内容	関連するP：Prosperity, Planet イオン環境財団「Future Earth」対話プロジェクトは、一連の対話と作業会合を経て、日本のSDGsターゲット設定のために、以下のプロセスとゴール12のターゲット案を提言する。 【提言】 １．日本のSDGsターゲット設定のための対話的プロセスについて ⓪ ゴールに関連する専門家からの話題提供を共有し、その後、以下の３つのステップに沿って議論を行う。 ① 2030年（またはその先の未来の）ありたい姿 ② 日本の現状に関する課題・問題 ③ ②を踏まえ、①を実現するために必要なターゲットの提案 ２．ゴール12のターゲット案 （グローバルターゲットに倣い、実施手段を示すものにはアルファベット表記を付ける。） ⓪ すべての主体が、地球規模の生産・消費活動と地球環境・社会課題の多面的な相互連関を認識する。 ① 政府（国・自治体）は、日本での生産・消費が世界の環境・社会に与える負荷を把握し、それを最小化するために、規制や支援の制度を整備する。 ② 生産者は、製品の生産から廃棄まで、ライフサイクル全体における環境や社会への負荷に責任を持つ。販売者は生産者・消費者と協力し、環境や社会への負荷が最小限になるバリュー

イオン環境財団「Future Earth」対話プロジェクト

『若手世代と考える 2030 年の未来像・日本の現状・SDGs ゴール 12 のターゲット案』

主催：(公財)イオン環境財団、国立環境研究所、Future Earth
共催：慶應義塾大学、グローバル・コンパクト・ネットワーク・ジャパン、（一社）SDGs 市民社会ネットワーク、（一社）SWiTCH

関連する P： Prosperity, Planet
イオン環境財団「Future Earth」対話プロジェクトは、一連の対話と作業会合を経て、日本の SDGs ターゲット設定のために、以下のプロセスとゴール 12 のターゲット案を提言する。

【提言】

1. 日本の SDGs ターゲット設定のための対話的プロセスについて

⓪ ゴールに関連する専門家からの話題提供を共有し、その後、以下の3つのステップに沿って議論を行う。

① 2030 年（またはその先の未来の）ありたい姿

② 日本の現状に関する課題・問題

③ ②を踏まえ、①を実現するために必要なターゲットの提案

2. ゴール 12 のターゲット案

（グローバルターゲットに倣い、実施手段を示すものにはアルファベット表記を付ける。）

⓪ すべての主体が、地球規模の生産・消費活動と地球環境・社会課題の多面的な相互連関を認識する。

① 政府（国・自治体）は、日本での生産・消費が世界の環境・社会に与える負荷を把握し、それを最小化するために、規制や支援の制度を整備する。

② 生産者は、製品の生産から廃棄まで、ライフサイクル全体における環境や社会への負荷に責任を持つ。販売者は生産者・消費者と協力し、環境や社会への負荷が最小限になるバリューチェーンを構築する。

③ 消費者はリユース・分別リサイクル等、廃棄しない選択をし、販売者・生産者と協力し、廃棄物を大幅に削減する。

futurearth
research. innovation. sustainability.

SDGsのターゲット（達成目標）設定に向けた提案

イオン環境財団「Future Earth」対話プロジェクト

国のSDGs円卓会議によるパートナーシップ会議に報告し、2023年末の日本のSDGs実施指針改訂へも提案。

共通のステップ
1．ありたい未来（2030年）のすがた
2．現状の問題点、課題
3．ギャップを埋めるための目標としてのターゲットの提案

・イオンモールでの意見募集
・対話ととりまとめの作業会合
・SDGs実施指針に関する第2回パートナーシップ会議へのインプット
↓
・SDGs実施指針改訂へ

futurearth
research. innovation. sustainability.

SDGsのターゲット（達成目標）設定に向けた提案

出典：首相官邸（令和5年3月17日）。

https://www.mofa.go.jp/mofaj/ic/gic/page1_001531.html
https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/100480582.pdf

2022年11月29日

SDGs 実施指針の改定へ向けた提言

SDGs 推進円卓会議
民間構成員

＜目次＞

提言概要(Executive Summary)	1
SDGs 実施指針の改定へ向けた提言	3
1. 前文	3
2. SDGs で目指す「ありたい姿」	4
3. 「5つの P」に沿った SDGs 実施の提言	5
(1) 人間(People)	5
(2) 繁栄(Prosperity)	6
(3) 地球(Planet)	7
(4) 平和と公正(Peace)	8
(5) パートナーシップ(Partnership)	9
(参考)繁栄(Prosperity)施策の例 一覧表	9
4. 日本としての SDGs ターゲット案	11
5. 「SDGs(持続可能な開発目標)推進のための基本法(仮)」構成案について	22
謝辞	23
添付資料	23
(1) SDGs 推進円卓会議 民間構成員名簿	23
(2)『パートナーシップ会議』の経緯	24

futurearth
research. innovation. sustainability.

イオン環境財団「Future Earth」対話プロジェクト 2023年度の活動概要と成果の公表

- 「SDGs実施指針に関するパートナーシップ会議2022（第２回）」に寄せられた提言
  https://www.japan.coop/wp/publication/11938
  ↓
- 団体名　　国立環境研究所
  添付ファイル：イオン環境財団「FutureEarth」対話プロジェクト_若手世代と考える2030年の未来像・日本の現状・SDGsゴール12のターゲット案_20221017
  https://www.japan.coop/wp/wp-content/uploads/2022/10/0d4622169a70ed14fe12c13a51de2985.pdf

- SDGs推進円卓会議主催第2回パートナーシップ会議（令和4年10月7日）にてさらに議論され、最終的には今年3月17日に、円卓会議からの提言の一部に盛り込まれて、岸田総理に手交
  https://www.mofa.go.jp/mofaj/ic/gic/page1_001531.html
- 円卓会議からの提言は
  https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/100480582.pdf

イオン「Future Earth」対話プロジェクト　時津イベント企画案

- 主催：イオン九州、イオン環境財団、Future Earth日本ハブ、国立環境研究所、長崎大学
- 協力（予定）：慶應義塾大学、Global Compact Network Japan、（一社）SDGs市民社会ネットワーク、（一社）SWiTCH
- 日時：2023年9月24日（日）
- 場所：イオン時津ショッピングセンター、1F　セントラルコート
- 目的：
  - ・生産と消費に関わる地球環境の現状を伝える
  - ・参加者が自身の消費行動を振り返る機会を提供する
  - ・日本におけるSDGsターゲットの設定を意識しつつ、生産と消費について消費者や若者との対話を深める
- 期待する成果：
  - ・若者を含む消費者がサステナブルな消費について意識や行動を変容する
  - ・2023年12月に予定されている、SDGs実施指針改訂への反映